



秋のワンディセミナー参加報告

井上 敏宏

1. 久しぶりの京都ワンディセミナー

前期まで支部委員をしておりました奈良先端科学技術大学院大学附属図書館の井上です。支部委員とは言っても、奈良に出向して以来、あまり活動に参加することができず、ワンディセミナーに参加するのも、久しぶりになっていました。現支部委員の皆様、準備から当日のお世話など、有難うございました。

9月23日土曜日の午後、京都市国際交流会館にて行われたセミナー「図書館・図書館員のためのWebの情報発信」(講師：岡本真氏)の感想を、という事でした。感想文は昔から苦手なので、やや出張報告的になってしまっていますが、以下に簡単な報告をしたいと思います。同時にあと、ひとり、ふたりほど、原稿を依頼されておられたので、ちゃんとした感想はその方達にお任せ致します。

2. 岡本さん

まず、講師の岡本真さんについて、私はメールマガジン「ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG)」を編集、発行しておられるという認識しか持っていませんでした。本業は別にお持ちで、ARGの活動はせいぜい、一日に一時間程度との事。後は本業に忙殺されておられるようで、その忙しさの中、あのような仕事ができる活動力には感心させられました。

会では、“Findability/Aggregation/Integration/Resource/Usability/Presentation”という6つのキーワードをベースに、実際に京都地区にある大学図書館のWebページを具体例にあげ、テンポの良い語りで90分間、講演していただき、その後の80分間では質疑応答・意見交換が行われました。日頃、講演・講義など受けなれていない私は90分間講演だと、途中で疲れる事も多いのですが、疲れない、引きつけられるような講演でした。

3. “FAIR UP”, Library!

岡本さんは、先程の6つのキーワードの頭文字をとり、“FAIR UP”, Library!と標語を掲げられています。「図書館のWeb発信にもっと晴れてほしい!」という思いを込められたとの事でした。

(次頁へ)

[目次]

秋のワンディセミナー参加報告	...	1
京都ワンディセミナー「図書館・図書館員のためのWebの情報発信」に参加して	...	3
京都ワンディセミナーに参加して	...	4
京都ワンディセミナー「図書館・図書館員のためのWebの情報発信」アンケート集計結果	...	5

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

では、それぞれのキーワードの意味するところを振り返ってみます。

第一のキーワード“Findability”は「見つけやすさ」あるいは「見つけられやすさ」です。Web ページにおける OPAC への入口（アイコンやリンク文字など）の位置、OPAC での検索結果リストの表示などといった面から、資料の見つけやすさがどうなっているのか？を、いくつかの大学図書館 ページを参考にしつつ、見て行きました。ある図書館はトップページだけでなく、どのページに行っても同じ位置に OPAC の検索窓がついていました。検索窓つまり文字を入力できるボックスというインターフェイスは見るからに「何か検索できるに違いない」という思いを起こさせ、アイコンやリンク文字のみの場合と比較し、利用者にとって見つけやすい。また、常に同じ位置にあることも、見つけやすさにつながる、というご意見でした。

また、検索結果リストの表示順については、「恐らく登録番号順などが多いが、利用者にしてみれば何の順番かわからないし、ほしい資料が見つけやすくなっているとも思えない。貸出回数や予約回数などを参照し、その順位付けを表示結果にも反映させられれば良いのに。数少ない図書館システムベンダーに、もっと工夫があっても良いのではないか。」という提案もありました。確かに Amazon などのもっと様々な見せ方をしてくれるし、考えてみれば所蔵詳細まで表示した順、なんかもできれば注目されやすいランキングになるかもしれない。

この“Findability”では他に、OPAC の検索結果として 1 書誌 1 URL の原則を守るべき、との提案もありました。ある図書館では、「OPAC のページがフレーム構造になっているため、どの所蔵の URL も同じ URL だったりする。これではリンクなどがはれずに不便」とのこと。

確かに機関リポジトリを構築する DSpace の画面では自身を表す URI を表示項目として持っていますし、電子ジャーナルでは各論文の詳細表示に DOI が表示されている事が多い。ブラウザの URL ウィンドウに表示されている以外にも、表示項目として出力できても良いかもしれない。

特に気になる話題が多かったので、第 1 キーワードが長くなりました。第二のキーワード“Aggregation”は「寄り合わせ」という意味で用いられました。館内のページだけでなく、学内、学外様々な有用なページにリンクなどをはり、利用者にとって有用な資源を寄り合わせて見せる努力も惜しむべきではないという提案でした。この頃の大学図書館ページは「有償契約データベースへのリンクだけで落ちてしまい、職員が努力して集めた有用な無償サイトの紹介などが目立たなくなってきた。」と残念な様子。そこまでまわす余力がなくなっている事実はあるかもしれません。

第三のキーワード“Integration”は「溶け合わせ」。「寄り合わせ」に似たような響きがありますが、こちらは「大学サイト」「附属図書館サイト」「部局図書室サイト」などといったひとつの大学内でも別々に作成され、探しにくく、わかりにくくなる事への注意でもあり、うまく別々のサイトが融合できている例の紹介などがありました。また、大学図書館 OPAC の書誌情報は検索エンジンに収集されにくい問題なども上がりました。この話題に対し、質疑応答では「セキュリティの問題で解放していない大学もある。確かに便利さのみを追求すれば収集された方が良いのだろうが、システムの運用上どうしようもない場合もあるのではないか。」との会場からの声もありました。

第四のキーワードは“Resource”でした。情報資源のお話かと思ったら、図書館の人材、設備、資金等の根源的なお話。ただ、この辺でこちらを注視している京都支部委員の目に気づいてしまいました。「これは原稿依頼？」と置いていたら、案の定・・・。

あと、第五のキーワード“Usability”は Amazon の検索ページで採用されている工夫などが紹介され、第六のキーワード“Presentation”では楽天のサイトに用いられている表現の紹介。例外的に関西以外の大学で、弘前大学附属図書館の例（トップページのタイトル部に「学生のための教育・研究支援を目指す」と明記）の紹介などがありました。

4. 感想

このように、今後の実務に活かせるようなヒントがたくさん得られました。後半の質疑応答では、Amazon や Google のようにどんどん便利になれば良いとするのではなく、大学という教育機関においては、教育という側面からも考えるべきではないかという意見が会場から出ました。ただ漠然と

Google で検索して何となく目的のもの、らしきものを得るのではなく、OPAC やデータベースの特性や構造などを示して、利用者自身が使いこなす方法を身につけてもらう事も図書館の務めではないか等の意見も出されました

確かに高機能な検索エンジンの登場で、この頃はそれに頼りすぎの傾向は見られます。Google にないものはないと結論づけてしまう、は極端にしても似たような場面は目にします。しかし、検索エンジンが解決への糸口になることが多いのも事実です。入口は Google でも、そのあと文献情報データベースで探したり、参考図書につながったり。「趣き」という点からの好みはさておき、私は冊子体の Science Citation Index で探すよりは、Web of Science の方が好きです。その方が手っ取り早いし、紙で手を切ることもない。Web of Science の利用法を説明するには、やはり引用関係の理解が必要となるし、これは図書館職員にでも説明されなければ、学生さんにはなかなか理解できないものです。いくら便利なツールになっても、教えるべきことはいくらでも出てきます。

Elsevier 社の ScienceDirect では、緑アイコンが契約タイトル (subscribed) だと、何度電話口で説明したことか。そんな私にとって、今回のセミナーは非常に有意義なものでした。今後とも、よろしくお願い致します。

いのうえ としひろ (奈良先端科学技術大学院大学附属図書館)

京都ワンディセミナー「図書館・図書館員のための Web の情報発信」に参加して

筑木 一郎

図書館はウェブでの情報発信のどこに失敗しているのか？ 失敗しているとしたらどのように克服すればよいのか？ そのような思いを持ちながら 2006 年 9 月 23 日(土)に京都市国際交流会館で開催された標記のセミナーに参加しました。

会員でもない私がこのセミナーに参加したのは、この日の講師である岡本真さんのお話を聞くことができ、対話することのできる滅多にない機会であったからです。岡本さんは、研究者の個人サイトやウェブ上の有益な学術情報源を紹介するメールマガジン ACADEMIC RESOURCE GUIDE を約 10 年にわたり発行し続けておられ、図書館の活動についても積極的に発言してこられています。このセミナーでも図書館界の外側から見た図書館活動への厳しいご意見が聞けるのではないかと思います、参加したのです。

講演は、"FAIR UP, Library! (図書館に晴れてほしい)" というキーワードで、大学図書館がウェブで情報発信する際のポイントを解説していただく内容でした。

F (Findability) = 見つけられやすさ、A (Aggregation) = 寄り合わせ、I (Integration) = 溶け合わせ、R (Resource) = 人材・設備・資金、U (Usability) = 使いやすさ、P (Presentation) = ヴィジョンの明示

OPAC を中心に、大学図書館が提供するサービスを最大限効果的に利用してもらうにはどのようにすればよいのか、京都にある大学図書館のウェブサイトケーススタディとして示していただきながら、具体的に詳細に語っていただきました。

私がお話を聞きながら、一見するとウェブサイトのデザインをどのようにすればよいかという話をされているようで、実はそれだけではないことに気づきました。単に細かいデザインをよくするというだけでなく、その大学図書館にとって何を最大のウリにするのか、誰に対して何をアピールするのか、コンセプトと戦略をしっかりと定め、それに基づいて全体的なデザインを決めるという

ことが重要なことなのだ」と理解したのです。

ヴィジョンに基づいた基本設計と多様な利用者へのきめ細やかなケア、その両立はなかなか難しいですが、他の大学等の事例を丁寧に見ていくことによって、少しずつ前進していけばいいのではないかとこのセミナーに参加して思うようになりました。

最後に、岡本さんの新著『これからホームページをつくる研究者のために』について紹介しておきたいと思います。この本は研究者がホームページを作る際に、どのような内容をどのように発信すればよいかを詳細に論じたものですが、私はこの本を読みながら大学という場にはこんなにも魅力的なコンテンツが溢れていたのかという思いを新たにしました。大学は、早くそのことに気づき、研究者の生の声を拾い上げながら、どのようにそれら魅力ある学術情報を、そして大学自身を社会に開いていくことができるか考えていかなければならないのではないのでしょうか。

つづき いちろう (京都大学附属図書館)

京都ワンディセミナーに参加して

池田 貴儀

初秋の京都、紅葉には少し早い9月23日(土)、京都市の国際交流会館で京都支部主催のワンディセミナーが開催されました。今回のセミナーは、「図書館・図書館員のためのWebの情報発信」というタイトルで、岡本真氏が講演されました。岡本氏は、学術情報発信をテーマにしたメールマガジン「ACADEMIC RESOURCE GUIDE」の編集長です。今回のセミナーは、講演時間が90分、質疑・意見交換80分と長い時間が設けられており、沢山の事例を聞くことができ実りある時間となりました。

講演のはじめに岡本氏は「自分が発信したものを評価し改善していくことが重要」という観点から「FAIR UP, Library」という言葉を紹介されました。この言葉は「Findability」、「Aggregation」、「Integration」、「Resources」、「Usability」及び「Presentation」の頭文字からなる造語で、「図書館のWeb発信にもっと晴れて欲しい!」という岡本氏の思いがこめられています。これらの言葉を踏まえながら、京都市内の大学図書館のホームページや企業のホームページの様々な事例を紹介されました。

講演の中でも私が特に興味深く思ったのは、ある企業の事例として紹介がなされた「ペルソナ」の話です。その企業では、ターゲットとなる人を想定するために、性格、年齢、性別、収入、行動パターン等を決め、「ペルソナ」という架空の人物を作り上げて分析を行い、その人たちに対するサービスを検討していくそうです。図書館でも対象となる利用者を想定するために、利用者像を作り上げることがありますが、企業が作る場合は売上等にも関わるため、かなり綿密に分析して作り上げているのだと思います。

また、インターネットの利用人口が増えるにつれて、利用する人のレベルが一定ではなくなることも指摘していました。利用人口が増えるということは、利用する人々の年齢層も広がり、全体としての利用者のレベルは、上がるよりはむしろ下がる傾向にあるそうです。そのため、ホームページ等で情報を提供する場合は、誰が見ても簡単に理解できるように工夫する必要があります。例えば、図書館員に馴染みのあるOPACという言葉も、利用する側にとっては、OPACという言葉の意味を十分に理解することは難しいものです。「検索」という言葉は一般的に使用されるようになり、利用者にとっても耳慣れた言葉になりましたが、OPACは未だに浸透している言葉とはいえません。岡本氏も、利用者のレベルが一定ではないことを考慮して、OPACという言葉をもっと誰が見てもわかりやすい言葉に置き換えた方がよいのではないかと指摘もされていました。

そもそも、利用者は何を求めて図書館又は図書館のホームページに来るのでしょうか？利用者は自分の探しているものの答えを求めて図書館に来ます。その答えを調べる上では、図書館が有償契約で提供している情報なのか、あるいは無償のコンテンツにたどり着けるためのルートを提供しているのかは問われません。これは当たり前のことかもしれませんが、岡本氏の講演を聞いていて、はっとさせられた点です。

契約に基づいて提供される情報は確かに保証されており、安全なものであることが多いです。しかしそれでは、同じようなリンクや代表的なリンク（例えば、法律ならここ！とか）ばかりとなり、図書館のホームページで提供される情報が画一化していく可能性もあります。情報の取捨選択をするのは利用者です。図書館員が、自分たちの手で地道に評価した情報や情報への探索ルートの一つずつ増やしていくことが、図書館の魅力的な情報発信につながっていくのではないのでしょうか。

私たち図書館員は、利用者のレベルが一定ではないことを念頭に置きつつ、利用者の考え方や行動レベルは常に変化していることを考慮し、利用する側の立場にたつて図書館が発信していく情報を検討、評価し、改善していくことが必要ではないのでしょうか。

いけだ きよし（日本原子力研究開発機構 研究技術情報部情報メディア管理課）

京都ワンディセミナー「図書館・図書館員のための Web の情報発信」 アンケート集計結果

京都支部 支部委員会

9月23日に実施しました京都ワンディセミナー「図書館・図書館員のための Web の情報発信」アンケートの集計結果は次のとおりです。なお、セミナーの参加者数は30名、うちアンケート回収枚数は17枚でした。

1. 広報について

セミナーの開催はメーリングリストまたはメールマガジンで知ったとのこと回答が約半数、またセミナー等の広報先として JLA や ARG のメールマガジンを希望するとのこと要望もありましたので、引き続き、メーリングリストやメールマガジンによる広報に努めたいと思います。また、できる限り多くの支部会員にご参加いただけるよう、引き続き、支部報や葉書による広報にも努めたいと思います。

2. 会場について

今回の会場「京都市国際交流会館」へのアクセスは概ね好評でした。引き続き、京都駅周辺(京都キャンパスプラザ等)や京都市国際交流会館など、アクセスしやすい会場の手配に努めたいと思います。

3. 開催時間・日程について

開催時間(13:30～16:40)、うち講演時間(90分)、討議時間(80分)ともに概ね好評でした。引き続き、適切な時間配分と司会進行に努めたいと思います。

4. 内容・全般について

次のようなご感想・意見などがありましたので、今後の研究企画の参考にしたいと思います。

- ・ ケーススタディの積み重ねで、多くのことが学べるということを再認識しました。自己満足に終わらないような、いろいろな可能性があるのだと改めて思いました。
- ・ 大学図書館内の人では中々でない発想、外部の人の目線が感じられ、大変勉強になりました。
- ・ 大学図書館以外の人にも参考になる内容でした。
- ・ ホームページについて、事例を挙げて意見を述べられていたので、分かりやすかったです。HPについて、よく調べることの大切さを感じました。
- ・ 明日からの業務にいかせないか考えてみることであればいいと思っている。
- ・ 具体的な大学の HP を例にとってお話しを伺えて大変よかったです。Web の環境が使えるようにしていただいて、スクリーンで話の出た HP を写せるような環境があればよかったですのではないかと思います。
- ・ Web サイトを評価するための視点はとても興味深かった。これからはそのような視点を持って、より良いホームページを構築していきたいと思います。
- ・ ちょうど自館の Web サイトについて検討していたところだったので、大変ためになりました。
- ・ 身近な京都市の大学図書館を例にして下さったので分かりやすかったです。
- ・ 明確な言葉で、考えておられることが語られていて、わかりやすかった。

5. 開催曜日について

開催曜日は概ね土曜日が多いとのことご回答でしたが、日曜日がよい、日曜日でも参加するとのことご回答もありましたので、機会があれば日曜日開催についても検討したいと思います。

6. 開催希望イベント

次のようなご要望がありましたので、今後の研究企画の参考にしたいと思います。

- ・ 林賢紀さんに OPAC2.0 についてお話していただきたい
- ・ 異なる館種の図書館員同士の交流
- ・ 電子ジャーナルの契約など、先行館の事例を聞きたい
- ・ 海外の図書館事情
- ・ 危機管理
- ・ 特に京都大学での情報リテラシーの取り組みを聞きたい

以上、アンケートの集計結果でした。みなさまのご意見、ご要望を取り入れ、引き続き、より良い研究企画に努めたいと思います。

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に 2006 年度（大図研会計年度 2006.07 - 2007.06）に入っておりますので、2006 年度の会費の納入をお願い致します。また、2005 年度以前の会費をお納めいただけていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の大綱浩一
までお問い合わせください。